

Book List ～沖芸の先生による、今読むべきこの10冊～ Vol.16

沖縄の文化・芸術はどう見られたのか —日本人による沖縄論—

選者：小林純子

沖縄県立芸術大学美術工芸学部 教授。専門分野は日本近代美術史・沖縄近現代美術史。成城大学大学院修了。1999年沖縄県立芸術大学に赴任。現在、芸術文化学研究科（後期博士課程）の研究科長を務めている。

県立芸大の
先生が選ぶ
おすすめ本10選



K75/Y52

琉球の富

柳 宗悦 監修：日本民藝館
筑摩書房 2022 年

柳宗悦は1938(昭和13)年の暮れに来訪し、一瞬で沖縄に魅了された。その後2年間で4回来沖し、民藝協会の同人とともに調査や収集に励み、多くの著作で沖縄の工芸や文化を紹介した。その文章は情熱的で、赤絵の温かみや石彫の卓越した力量を誉め称え、鋭い鑑賞眼で沖縄の織物に正統性や純粋さを発見し、型染めに徹する紅型を「染物の染物」と評価した。また、工芸品の造形に着目するだけでなく、それを育んだ生活や精神にまで言及し、玉陵に「精霊の實在」を感じ、壺屋の自然で誠実な生活に健全な陶器が生まれる基盤を見ている。沖縄の伝統工芸は必ずしも「民藝(民衆的工芸)」ではないが、今でも柳の理論や価値観から受けた影響は大きい。



K302/O42

沖縄文化論 忘れられた日本

岡本 太郎
中央公論新社 2024 年

前衛美術家の岡本太郎は、柳宗悦とは対照的に沖縄の伝統工芸などには興味を示さず、最も感動を受けたものとして御嶽(うたき)を挙げる。壮麗な殿舎や神像があるわけではなく、石を四角く切った香炉があるだけの御嶽へ行き、その清潔で透明な空間に驚き、「何もないということの素晴らしさ」を見出した。岡本は「縄文」の発見者としても知られるが、御嶽の持つ原初的な神秘性に鋭敏に反応した。また、沖縄の人々の営みに強靱さや永劫性を見て取り、虚飾に満ちた伝統文化を反省している。あとがきでは、このような沖縄体験を「それは私にとって、一つの恋のようなものだった」と書いたが、岡本の沖縄への思いを端的に表現する言葉として有名である。

沖縄文化の遺宝



K709 /KA31

鎌倉 芳太郎

岩波書店 1982 年

鎌倉芳太郎は 1921 (大正 10) 年、美術教師として沖縄に赴任した。以来、琉球・沖縄の文化芸術の研究に邁進したが、この大著が出版されたのは復帰後のことだった。王国時代の史料を駆使した文章と膨大な写真によって、鮮やかに戦前の沖縄の姿が浮かび上がってくる。

琉球 —建築文化—



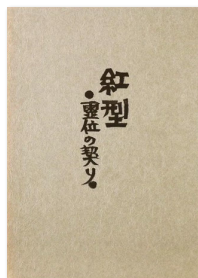
K 52/I89

伊東 忠太

東峰書房 1942 年

建築史家の伊東忠太は、鎌倉芳太郎の琉球芸術調査の共同研究者である。まだ若い研究者だった鎌倉を援助し、首里城取り壊しを防いで文化財に指定させた。本書で伊東は、首里城正殿を「和漢の要素を摂取して、新たに琉球特殊の様式を大成したもの」と看破している。

紅型 霊位の契り



K75 /O43

岡村 吉右衛門

吾妻書房 1991 年

民藝同人で染色家の岡村吉右衛門は、柳宗悦に同道して沖縄を訪れ、芹沢銈介とともに紅型の調査に当たった。岡村には宗教哲学者でもあった柳に通ずるところがあり、紅型衣裳の色や文様には霊力が宿ると言い、シャーマニズムやアニミズムと関連させた解釈を示す。

海上の道



K38 /Y53

柳田 国男

角川学芸出版 2013 年

日本人の祖先は南方から海上の島唄いにやって来たという、民俗学界の偉人による壮大な説が展開されている。今回の選書のうちには、沖縄への興味の出発点としてこの書を挙げるものが複数ある。「海上の道」は小説的仮説にもかかわらず、芸術の世界でも大きな影響力を持つ。

沖縄 その危機と神々



K 200.4/TA87

谷川 健一

講談社 1996 年

柳田国男の民俗学を発展的に継承した谷川健一は、沖縄の社会問題に対しても積極的に発言した。この書には、宮古・八重山の人頭税について述べて沖縄の複雑さや孤島苦を明らかにした名著とともに、復帰後の文化問題や祭祀継承問題などを語る文章が収められている。

島／南の精神誌



K04 /O47

岡谷 公二

人文書院 2016 年

岡谷公二は美術史家で、ポール・ゴーギャンの研究で知られる。ゴーギャンが南太平洋のタヒチを目指したように、岡谷の興味も南へ、そして沖縄をはじめとする島嶼へと向かった。さらに御嶽(うたき)の起源や伝播を追究し、各地の神聖な森を訪れ思索を深めている。

沖縄日記 柏崎栄助遺稿集



K289/KA77

柏崎 栄助

葦書房 1989 年

柏崎栄助は漆器工房「紅房(べんぼう)」のデザイナーで、モダンで無駄の無いデザインを得意とする。毎年のように那覇での仕事の後に八重山諸島を巡った。旅先での日記や書簡には、過酷な自然と生活、そこから生まれる道具に造形の原点を見出す様子が綴られている。

朱もどろの華 沖縄日記



K 95/TO72

東松 照明

三省堂 1976 年

写真家の東松照明が沖縄に来たのは、沖縄返還の日米交渉が本格化した1969(昭和44)年だった。日本人シリーズと占領シリーズの取材や撮影が目的だが、その後は生涯沖縄に関わった。復帰前後の沖縄がリアルに語られ、写真は濃密だが不穏な雰囲気を漂わせる。